

葛・合などの元代北方音について

中村雅之

1. 問題点

果摂一等開口の「哥・可・何」などの元代北方音は非円唇の/kə, k'ə, xə/であったと考えられる¹。旧入声の「葛・渴・合」も、『中原音韻』においては「哥・可・何」とともに歌戈韻に属しているから、同様に/-ə/であったことになる。『蒙古字韻』においても「葛・渴・合」と「哥・可・何」の韻母は同じパスパ文字で表記されている。

しかし、この想定を拒むかのような事実が長田夏樹(1953)²において指摘された。それは、元代のモンゴル語漢字音訳において、果摂一等開口の「哥・可」がモンゴル語/gä, kä/を表すのに対して、入声字の「合・葛」がモンゴル語/ga/を、「渴・喝」が/qa/を表すのに用いられているというものである³。もしもこれらの入声字が果摂一等と同音の韻母を持っていたのであれば、異なるモンゴル語音に対応するのは自然とは言えないことになる。そこで、長田(1953)では、果摂一等開口の韻母に[ə]を、入声字「合・葛・渴・喝」の韻母に[e]を想定して、モンゴル語の漢字音訳の状況を説明しようとした。さらに吉池(2005)では、次のように入声字に短促調を想定をし、それによって母音がやや広めに聞こえ、モンゴル語/a/の音訳に用いられたとした。(左がモンゴル語音)

/gä/	哥箇(舒声・開口)	/ɣ/ [ɣ]
/kä/	可(舒声・開口)	/ɣ/ [ɣ]
/ga/	葛合(入声)	/ɣʔ/ [eʔ]
/qa/	渴喝(入声)	/ɣʔ/ [eʔ]

まことに興味深い見解であるが、本稿ではあえて別の解釈を試みることにしたい。

1 cf. 吉池孝一(2005)「哥葛などの元代音について」『KOTONOHA』36.

中村雅之(2006)「近世音資料における果摂一等の表記」『KOTONOHA』39.

2 cf. 長田夏樹(1953)「元代の中・蒙対訳語彙「至元訳語」」(『長田夏樹論述集(上)』ナカニシヤ出版、2000、所収).

3 これらの音訳漢字については、長田論文では誤字や解釈の問題等があり、安心して従えない部分があるが、吉池(2005)による検討を経た結果として、とりあえず「合・葛・渴・喝」の4字を挙げておく。実際には「合」は/ga/にも多く用いられる。また、モンゴル語の/ga, qa/を表す漢字は他にもあるが、ここでは『中原音韻』歌戈韻に属する字だけを対象としている。他の音訳字については吉池(2006)に詳しい。

cf. 吉池孝一(2006)「至元訳語のq とγについて」『KOTONOHA』43.

2. 近世音における/ka/と/k'a/

漢語近世音において、あるいは現代音においても、/ka/および/k'a/という音声は通常の漢語の語彙としてはほとんど用いられない。用いられるのは擬音か非漢語語彙に限られると言ってよい。もしも/ka/と/k'a/が一般的な音として存在していたならば、モンゴル語の/ga/や/qa/を表す音訳字として自然に用いられていたはずである。

吉池(2006)によれば、『至元訳語』において、モンゴル文語のqa-に相当する音節(すなわち/qa-/)を表す音訳漢字は「匣(7例)」「合(6例)」「下(3例)」「喝(1例)」「遏(1例)」であり、かなりバラエティに富んでいる。当時の漢語に/ka/および/k'a/という音節が存在しなかったために、ばらつきが生じたものと考えられる。そうであるならば、これらの例は適切な音訳字がなかったためにやむなく用いられたものか、あるいは伝統的な音訳を踏襲したものであって、これを音価推定に利用するには慎重を要するであろう。

3. /ka/、/k'a/、/ha/を表す専用字

清朝の『御製滿珠蒙古漢字三合切音清文鑑』では、モンゴル語や満洲語の/ga/、/qa/、/ha/を表す音訳漢字は、それぞれ「噶」「喀」「哈」で統一されている。全て口偏を付した字であり、通常の漢語には用いない外国語音の音訳字であることが一見して分かる。いわば音訳のための専用字である。「噶」や「哈」をモンゴル語の音訳に用いることはすでに明代の『登壇必究訳語』にも見える。

さて、元代の漢字音訳においては、モンゴル語/ga/、/qa/、/ha/を表すための専用字はまだ出来ていなかった。そこで、/kə/、/k'ə/、/hə/という音を持つ漢字を便宜的にモンゴル語の/ga/、/qa/、/ha/に当てたのではないかと、というのが私の推測である。具体的には、字音としては/kə/、/k'ə/、/hə/という音しか持っていなかった「葛」「渴・喝」「合」を、便宜的にモンゴル語の/ga/、/qa/、/ha/の表記に用いたということである。

「合」は実際にはモンゴル語/ga/、/qa/、/ha/の全てに用いられており、最も使用範囲が広い。また、「葛」「渴」「喝」は全て同じ声符を共有しており、一つのグループをなしている。したがって、問題は「葛」と「合」の扱いに集約できる。この二字が後に口偏を付してモンゴル語や満洲語の/ga/と/ha/の音訳に用いられることを考慮すれば、これらは元代において既に、専用の音訳字として選ばれつつあったと言えるのではないかと。つまり、「葛」と「合」は字音としての/kə/、/hə/のほか、モンゴル語の音訳字として/ga/、/qa/、/ha/の表記に用いられたのである。

『至元訳語』において/ga/、/qa/、/ha/の全てに用いられた「合」は、明初の『元朝秘

史』や甲種『華夷訳語』では、「^甲合」(/ga/~/qa/)と「哈」(/ha/)という表記になった。さらに明末の『登壇必究訳語』ではモンゴル語の音韻変化に伴って、「噶」(/ga/)と「哈」(/ha/←文語の「qa」に相当)という表記になる。これらはいずれも、元代の「葛」「合」の音訳字としての用法から発達したものと考えられるのである。

4. 『至元訳語』の「阿」

最後に、これまで述べたことの参考として、「阿」の用法について触れておきたい。『至元訳語』においては、「阿」はモンゴル語の/a/と/ä/の双方の音訳に用いられる。なぜ、このようなことになるかと言えば、「阿」には字音としての/a/のほかに、外国語音の/a/を表す音訳字としての用法があるからであろう。「阿」はやはり『中原音韻』の歌戈韻に属する字であり、/ə/が正式の字音であるが、漢語の字音の体系に/a/が欠如しているため、外国語音/a/の音訳字として「阿」が利用されたのである。ちょうど「葛」や「合」の場合に似ている。「阿」はその後の明清代にも、/a/を表す音訳字として安定的に用いられ、現代では口偏を付した「啊」という表記で語気助詞などに用いられている。